

「まず最初に！桜と桜の和歌について」

桜は日本を代表する花ですが、昔からそうだったのでしょうか。

万葉集では、4500首のうち、桜を詠んだ歌はたった30首余です。万葉人は花と言えば萩であり、梅でした。

ところが古今和歌集の時代になると桜を詠んだ歌はぐんと増え、花と言えは桜になりました。

それでは知っておきたい時代を超えて詠みつがれる桜の和歌を見ていきましょう。

♪桜を詠んだ和歌ベスト10！時代を超えて詠みつがれる魅力

桜の和歌と言えは「西行」

願わくば 花の下にて春死なむ

その如月の望月の頃

西行は、桜の国の桜の名所と言われる吉野に小さな庵を結び、6年間暮らししました。桜を詠んだ歌を遺していますが、後世の歌人に多大な影響を与えました。

まさに「西行以前」「西行以降」といっぺんこの差です。

桜の和歌といえば万葉集「柿本人麻呂の一首」

桜花 咲きかも散ると 見るまでに

誰れかもここに 見えて散り行く

柿本人麻呂の有名な桜の和歌です。

桜の和歌といえば古今和歌集「あまりに有名な二首」

世の中に 絶えて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし

在原業平

もし、世の中に桜の花がないならば、春を過ぎす人の心はどんなにのどかなことでしょうか。桜の花があるから、散ることが気になり落ち着かないと反語的に桜の魅力を詠んでいます。

花の色は、うつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

小野小町

「こ」でいう花はもちろん桜です。桜の花の色があせてしまったように私の容姿も衰えてしまった、あれこれ悩んでいる間に。

桜の和歌といえば新古今和歌集「定家の一首」

桜花 咲きにし日より吉野山

空もひとつにかほる白雪

藤原定家

定家がこの歌を詠んだ年の春に西行が亡くなっています。桜の歌を詠むなら、西行が愛した吉野山の桜をという思いが感じられます。

桜の和歌といえば「良寛も、秀吉も、家康も」

いづれ子ども 止べにゆかむ桜見に

明日ともいはば散りもこそせめ

良寛

さあ、子どもたち、花見に行こう。明日なんて言っていたら散ってしまうよ。良寛らしい歌ですね。

乙女子が袖ふる山に 千年へて

ながめにあかじ花の色香を

豊臣秀吉

咲く花を散らさじと思ふ 御吉野は

心あるべき春の山風

徳川家康

秀吉と家康が吉野の千本桜を詠んだ歌です。今も昔も、桜と言えば吉野山。桜を愛する人の聖地です。

■ 桜の和歌といえば「現代歌人も」

清水へ祇園をよぎる桜月夜

今宵逢ふ人みなうつくしき

与謝野晶子

清水へ行こうと祇園を急いでいると、桜も月も美しい。心が浮き立っているせいか、逢う人みんなも美しい。晶子らしい歌ですね。